

SY6-1

いのちの授業－奇跡がくれた宝物

小沢 浩

島田療育センターはちおうじ 神経小児科

＜はじめに＞

令和3年度、小・中学校における不登校児童生徒数は244,940人、小・中・高等学校及び特別支援学校における「いじめ」の認知件数は615,351件、令和4年の小・中・高等学校の自殺者数は512人と、増加の一途をたどっている。「いのち」を考えること・思うことが、大切なのではないだろうか。2012年に、母校の天城中学校（伊豆市）で「いのちの授業」をさせていただき、以後「いのちの授業」の取り組みをしている。

＜方法＞

「いのちの授業」は、以前から活動をしている田中総一郎先生（あおぞら診療所ほっこり仙台院長）に相談し、組み立てた。1. 自分が生まれたときのことを家族一名からインタビューする。2. インタビューの内容を作文にまとめる。3. 「いのちの授業」で作文を紹介する。4. 障害児の紹介および体験をして障害について考える。5. 授業の感想を書く。

＜作文の紹介＞

二人目の赤ちゃんを望んでいたお母さんは病気でお医者さんに無理だと言われていました。東京の病院に通いやっと授かった赤ちゃんが紗矢香です。出産までもトラブルの連続でした。妊娠十ヶ月の時に腎炎になり、高热で入院、お腹の子は大丈夫か不安で、どうかお腹の子は助けて下さいと祈り続けました。いろいろな事を乗り越えての出産だったので、本当に無事に生まれてくれてありがとうと心の底から感謝しました。

産婦人科の先生が、妊娠して無事出産するのがあたり前のように思われがちだが、無事に生まれてくると言うのは、それは奇跡なんだと話してくださいました。だから、あなた達が生きていると言う事は、たくさんの奇跡が与えてくれたかけがえのない宝物なのです。その尊い命を大切にしてください。

＜障害という個性の話＞

視覚障害と言われている人の話である。いつも明かりの無い世界で住んでいるので、夜に電気はいらぬ。そのため、電気をつけていないで過ごしていたが、そうすると訪れた人がいないと思ってみんな帰ってしまった。そのため仕方ないので電気をつけることにした。「夜、電気をつけないと生活できない人たちって不便ですね。」と語っていた。視覚障害と言われる人たちは光がなくても生活できる。点字が読める。でも我々にはそれができない。障害って思っていることは、我々と違うことがあるっていうだけで決めてしまっているのではないのだろうか。見方を変えれば、我々がもっていない才能をいっぱい持っている人たちなのである。

＜最後に＞

医療に携わっていると、「いのち」の物語に日々接していく。その物語を「いのちの授業」で伝えていくことが、ますます大切になっていく。